

保育所における親子関係支援に関する基礎的研究（1）

肥後 功一*

Koichi Higo

A Basic Study on Support for Parent-Infant Relationships in Nursery Centers (1)

要 約

保育所園における子育て支援、中でも保護者に対する支援は、その重要性和緊急性が叫ばれながらも、依って立つべき体系化された理論や方法論が必ずしも十分とは言えず、保育の現場では経験と試行錯誤による実践が日々続いている。本論では親子の関係に対する心理臨床的支援という立場から、保育実践における保護者支援の手がかりとなる指標（見方）を得ることを目的に、アンケート調査の分析を行った。その結果、子どもに対してつい腹立ちを感じる場面の分析から、子どもの行動をうまくコントロールできない「制御困難」因子と、子どもからの関わりを感情的に受け入れることができない「受容困難」因子の存在が示唆された。また「制御困難」については母親と子どもとの関係の改善（たとえば行動制御の方法がわかることなど）が鍵になるのに対して、「受容困難」については母親自身の対人コミュニケーションとの関連が示唆され、周囲の大人との関係（たとえば家庭での人間関係や保育所の保護者同士の関係）が鍵になる可能性が示された。

【キーワード：親子関係支援、保育所、子への嫌悪感情、制御困難、受容困難、親の対人関係】

1. はじめに

平成21年4月1日より施行された改定保育所保育指針は、2度の改定（平成2年、平成12年）を経て、3度目の改定となったものであるが、これまでの局長通知から厚生労働大臣告示となり、より規範性を有する基準として性格づけられるとともに、広く社会に対して保育の質を担保する役割をもつものとして位置づけられている。

保育の組織的質向上を支える仕組みとして「保育課程」を編成することとなったこと、小学校との連携を進める具体的な方策として「保育所児童保育要録」の送付が義務づけられたこと、などいくつかの大きな改定があるが、その一つとして新たに「第6章 保護者に対する支援」が設けられたことを挙げなければならない。

この章では保護者支援を児童福祉法第18条の4で定められた保育士の業務として規定した上で、その基本原則を確認するとともに、入所児童の保護者への支援から地域における子育て支援に至るまで、たいへん広範な保護者支援の中身について網羅的に述べられている。

もちろんこのような指針の改定を待つまでもなく、実際の保育所保育の中で、何らかの組織的な保護者支援を行う必要があるとの認識、またその考え方や方法を具体的に学びたいという要望、あるいは保護者支援にまつわるトラブルやそのコンサルテーションを求める声などの確実な高まりがあり、地域の子育て相談（発達相談、心理臨床相談）を実施してきた筆者にもそれが伝わって

る機会が増えてきた。子育て支援の施策として展開されてきた特別保育事業（延長保育、夜間保育、休日保育、一時保育、病中・病後児保育、障害児保育など）が次第に充実してくるにつれ、毎年開催される島根県保育研究大会の研究発表では、保護者支援、保護者連携などのテーマがどこかの分科会で必ず取り上げられる傾向がみられるようになった。

こうした保育現場のニーズに対応して日本臨床心理士会は、既に在った子育て支援委員会（第1回子育て支援講座（研修会）を平成17年に開催）とは別に保育臨床心理士専門委員会を立ち上げ、「第1回保育心理臨床研修会—保育臨床心理士の活動を考える—」を平成20年に実施している。また日本教育心理学会においても準備委員会企画シンポジウムとして「子育て支援のこれから—幼稚園・保育所・小学校・中学校における保護者対応を考える—」が開催され、保育・教育現場での多様なまた専門的なサポートの必要性が検討されている。

このような動きの背景にはもちろん児童虐待という大きな社会問題の拡大があり、児童福祉施設としての保育所はもちろん、幼稚園を含む学校教育の場でも育児支援、保護者支援が強く求められるようになったことから、まずは親の心理的課題の現状について、これをどのように描出するかに関する研究も数多く見られるようになった。ここではそれらを詳細に検討する紙幅は無いが、たとえば親の育児に関する心理学的課題を扱う多くの研究が用いる代表的な概念が「育児不安」あるいは「育児ストレ

* 島根大学教育学部心理・発達臨床講座

ス」であろう。

たとえば江上(2005)、宮本(2007)はいずれも牧野(1982)の14項目から10項目選んで「育児不安」尺度とし、1次元(合計得点)としてこれを扱っている。育児不安は(一時的、瞬間的な心配等ではなく)蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態であるとする牧野の定義に依拠したものである。荒巻ら(2004)は幼稚園における子育て支援の利用者(利用希望者)の育児不安が、利用の必要性を感じない保護者より高いことを示したが、この際の「育児不安」に関する項目は、「子どもをうまく育てていけるか不安になる」「他の母親と比べて、自分の育て方でよいのか不安になる」「育児のことでどうしたらよいかわからなくなる」「子どもにうまく対応できていないと感ずることがある」「子どもがわずらわしくてイライラする」「友人や知人が充実した生活を送っているようなので焦りを感じる」「自分の子どもでもかわいくないと感ずることがある」の7項目で、主因子法による因子分析の結果、1因子性($\alpha=.82$)と考えられた。

また谷田・青木(2009)は「子育てに関する感情」に関する7項目から「子育て充実感」と「子育て負担感」の2因子を抽出し、母親からみた夫婦間の相互性との関連を検討したが、「子育てに関する感情」の元となった11項目は加藤・鶴田(1998)による「育児ストレス尺度」であった。小林(2009)は乳児の母親の抑うつ傾向について夫からのサポート可能性及びコントロール可能性との関連を検討したが、この際に用いた「育児関連ストレス」6項目は「子どもが激しく泣く」「子どもの寝付きが悪い」「子どもの睡眠時間がまちまちである」「子どもがぐずるとなだめにくい」「自分がやりたいことが思うように出来ない」「この先ちゃんと子育てができるか心配になる」であった(佐藤ら(1994)及び小林(2006)を参考にしたもの)。これら6項目は子どもの行動そのもの、子どもの行動に起因する生活時間上のストレス、子どもの行動に対する制御感、育児に伴う全般的な拘束感、育児への自信(将来展望)など、6項目の中になかなか多様な側面が含まれているが、主成分分析の結果、1因子構造として取り扱われている($\alpha=.81$)。

笠原(2000)は保護者の保育者への援助要請について、「どのようなことをどのような保育者に援助要請をしたのか、どのような判断を経て保育者へ援助要請するのか、その過程に保護者側の社会統計的変数や育児ストレス、パーソナリティ特性などの心理的変数がいかに影響するのかなどはまったく検討されていない。」として育児ストレス尺度を含む多くの変数について詳細な検討を行っている。この際に用いられた育児ストレス尺度は「母親関連育児ストレス得点」と「子ども関連育児ストレス得点」の2つに得点化されている。また菅野(2001)、菅野ら(2009)は子どもに対する「不快感情」をとりあげ、育児の中で親が成長していく上で果たすそのポジティブな影響について検討している。

最近では荒巻・無藤(2008)が上述のような育児不安、育児ストレス、育児への否定的感情などについて包括的

な整理を試み、育児への否定的・肯定的感情は、「負担感」「育て方/育ち方への不安感」「肯定感」によって整理・分類が可能であるとしている。

本研究は、こうした研究の流れを踏まえつつ、親子関係への心理臨床的支援という立場から、育児場面(子どもの世話をすること、子どもと遊ぶこと)の感じ方、子どもについて腹が立ってしまう場面の評価、親自身の対人関係(コミュニケーション)の3つの角度から主に検討を加えるとともに、地域(島根県松江市)における子育ての具体的な実態についても調査し、それらの分析から地域の保育所における保護者支援の手がかりとなる指標(見方)を得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

松江市保育協議会及び松江市保育研究会の協力により、同協議会に所属する公私立29保育所・保育園(以下、両方を合わせて保育所とよぶ)に子どもを通わせている保護者(2,713世帯)に調査用紙を配布した。当該児が2人以上ある場合でも、問8(子どもの気になる様子)への回答にあたっては児のイメージを明確にして回答する目的で1名を選択して回答するよう求めたため、1世帯につき1通の配布とした。

(2) 調査期間、配布・回収方法、回答者の指定

調査期間は2006年(平成18年)11月~12月。対象となった29保育所を通じて保護者に配布され、無記名で回答を求め、12月初旬を目処に、各保育所において回収された。回答者として「毎日のお子さんの世話を主に行っている方が記入してください」として、日々の養育を実際に行っている保護者による記入を求めた。

(3) 調査用紙の構成

①フェイスシート

次の項目に記入を求めた。

- ・記入者の子どもとの関係(母, 父, 祖父母等)
- ・現在の子の人数(性別, 年齢, 所属)
- ・家族構成(核家族, 祖父母同居の2つより選択)

②平日及び休日の養育時間の比率

「子どもといる時間」全体を10とした場合、次の5つの養育行動にかかる時間がどれくらいの比率になるか、数値で回答を求めた。なお本研究における「平日」「休日」は、保護者の勤務の有無に対応して用いることとし、回答者(主な養育者)の仕事のある日又は保育所に子どもを預けている日を平日、そうでない日を休日と規定した上で、回答を求めた。

- ・子どもの世話
- ・子どもと遊ぶ
- ・買物, 洗濯, 掃除, 子ども以外の家族の世話等
- ・子どもと離れて一人, 夫婦, 友人とくつろぐ
- ・睡眠

③平日の時間に関する主観的評価

次の6項目について、4(そう思う)~1(そう思わ

ない)の4段階で評定を求めた。

- ・「子どもの世話をする時間」に充実を感じるか
- ・「子どもの世話をする時間」に苦痛を感じるか
- ・「子どもの世話をする時間」がもっと長ければよいのに…と感じるか
- ・「子どもの世話をする時間」がもっと短ければよいのに…と感じるか
- ・もっと「自分一人の時間」が持てるとよいのに…と感じるか
- ・もっと「子どもなしで夫婦や友人と自由に過ごせる時間」が持てるとよいのに…と感じるか

④子どもの世話に要する時間とその評価

「子どもの世話」のうち、朝食、夕食、風呂、就寝の4場面を取り上げ、それぞれ平日・休日別に

- ・要する時間
- ・4段階の主観的評価(4=とても楽しい, 3=やや楽しい, 2=場合による, 1=楽しくない(楽しむ余裕はない))の記入を求めた。なお、風呂と就寝については、主な担当者についても記入を求めた。

⑤つい腹が立つ育児場面の評定

子育てでよく出会う“子どもについ腹を立ててしまう場面、苛立ちを感じる場面”を15選び、「4. すごく腹が立つ」「3. 少し腹が立つ」「2. ほとんど気にならない」「1. まったく腹が立たない」の4段階評定を求めた。こうした項目は子どもの年齢によっても異なってくるが、筆者のこれまでの保育所・幼稚園等での育児相談等においてよく出会う質問や事例から、比較的育児全般についてどの保護者にも共通すると思われる15場面を抽出した(図14参照)。

⑥子どもの対人関係上の「気になる様子」

子どもの対人関係上の「気になる様子」に関する14項目について、どの程度該当するか、各々4段階で評定を求めた(4. 気になる 3. ときどき気になる 2. たまに気になることがある 1. 気にならない, 図17参照)。

これら14項目は肥後(2001, 2004)で用いた「子どもの気になる様子」48項目(及びそれらの因子分析によって抽出された7因子構造)を参考に作成した。ただし前研究においては回答対象者が保育士や小学校教師であり、クラスで実際に「気になっている子ども」を想定して記入を求めするために用いたのに対し、本研究では家庭の保護者に普段の子どもの様子の中で「気になる」ことを問うものであることを勘案して表現上の工夫を行った(問題となる行動の表現をより一般的な水準で記述する、一般的に気づかれにくい「学習困難」の因子に関する項目を除外するなど)。

⑦養育者自身の対人関係

記入者(主な養育者)自身の対人関係について、全般的な評価(3段階: 3. どちらかといえば得意, 2. 普通, 1. どちらかといえば苦手)を問うとともに、次の5つの場面について、コミュニケーション上のストレスを4段階(4. 楽, 3. まあ楽, 2. 場合による, 1. 疲れる)で回答するよう求めた。

- ・家庭での大人同士のコミュニケーション
- ・家庭での子どもとのコミュニケーション
- ・職場での同僚とのコミュニケーション
- ・保育所での保護者同士のコミュニケーション
- ・保育所での担任(保育者)とのコミュニケーション

3. 結果と考察 I 一質問項目ごとの分析

(1) 回収率, 回答者の内訳, 家族構成, 子どもの人数・性別・年齢

29保育所に配布された2,713世帯のうち、回答が寄せられたものは1,751世帯で、回収率は64.5%であった。うち集計上明らかな問題があるもの(無回答部分が多い、すべて同じ評定値に○が付いている等)を除き、集計シートに入力できたもの(有効回答件数)は1,742件であった。

これを記入者別にみると、有効回答の94.8%にあたる1,651件が母親による記入であった。次いで、父親が65件(3.7%), その他18件(1.0%), 未記入8件(0.5%)であった。

家族構成では核家族が1,293件(74.2%), 祖父母同居(同一住宅内や敷地内での別生計の場合を含む)が423件(24.3%)であった(未記入26件)。

子どもの人数については記入のあった1,738件のうち、2人が826件(47.5%)と最も多く、次いで1人が570件(32.8%), 3人が295件(17.0%), 4人以上(4人~7人)が47件(2.7%)であった。

また保育所に通っている子どもの他に小学生のきょうだいがある家庭が32.2%, 同様に中学生のきょうだいがある家庭が5.7%であった。

子どもの性別について記入のあった1,733件(子どもの延べ人数は3,220人)のうち、男児は1,675人(52.0%), 女児は1,545人(48.0%)であった。

また保育所に通う子どもの年齢について記入のあった1,737件(子どもの延べ人数は2,394人)のうち、1歳未満児が8.2%, 1歳児が12.4%, 2歳児が16.1%, 3歳児が17.5%, 4歳児が17.3%, 5歳児が17.1%, 6歳児が11.4%を、それぞれ占めていた。

回答者の94.8%が母親であったことから、以下は、1,651件の母親からの回答のみを集計及び分析の対象とした。

(2) 一日の時間配分とその感じ方~平日と休日の比較を通して

平日(この調査では「保育所に子どもを預けている日」をさす)の場合は、帰宅してから翌朝までの時間を10として、またそれ以外の休日の場合は、1日の時間全体を10として、子どもに関わる時間やそれ以外の家事等5つの生活時間がどのくらいの割合を占めるか、評定を求めた。この評定方法は、客観的な時間の記入ではなく、主観的な(心理的な)時間の感じられ方(評価)を調べようとするものである。

全回答を平均した結果は図1に示したとおりで、平日と休日とでそれほど大きな時間配分の隔たりはない。平日は、睡眠の占める割合が大きく子どもと遊んだりする

時間は10のうち1程度しか取れないと感じている。これに対して、休日は子どもと遊ぶ時間が、それほど大きい比率ではないものの平日の2倍程度に評価されている。子どもの世話にかかる時間も平日より微増している。

しかし同時に家事にかかる時間もやや多くなるとともに、こうした“しわ寄せ”は睡眠時間の比率を相対的に下げる形となって現れ、結局のところ全体の評価としては「休日にゆっくりくつろぐ」ことにはなっていない現状が伺える。

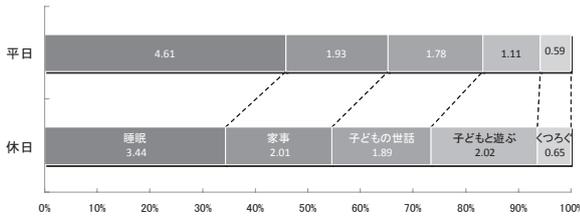


図1 一日を10とした場合の時間配分

③「子どもの世話をしている時間（平日）」をどう感じているか

平日、子どもの世話をしている時間について母親はどのように感じているだろうか。肯定的な表現で質問した場合①「この時間にもっとも充実を感じる」かどうか、③「この時間をもっと長ければよいのに…と感じる」かどうかと、否定的な表現で質問した場合②「この時間にもっとも苦痛を感じる」かどうか、④「この時間をもっと短ければよいのに…と感じる」かどうか、それぞれへの同意傾向（“そう思う”かどうか）を比較検討した。（図2、図3）。

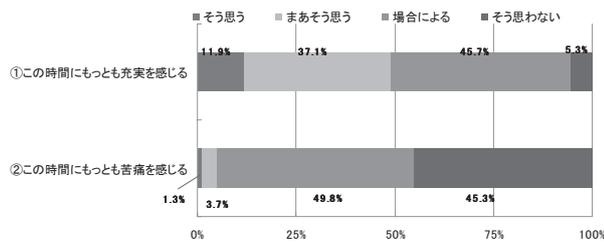


図2 「子どもの世話をしている時間」をどう感じるか（1）

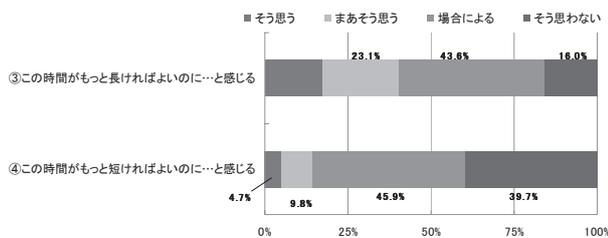


図3 「子どもの世話をしている時間」をどう感じるか（2）

質問①では「充実を感じる」への同意傾向は全体の約半数（803件）にのぼった。一方、質問②「苦痛を感じる」

への同意傾向（“そう思う、まあそう思う”）は5%（81件）であった（図2）。このように「充実を感じる」とする回答が多かった一方、「場合による」という回答が、“充実”“苦痛”ともに約半分を占めることにも注目しておきたい。つまり、子どもの世話をしている時間が“充実”を感じられる時間になるか、それとも逆に“苦痛”を強いられる時間になるか…は流動的なものであり、たとえば子どもが素直に言うことをきいてくれスムーズに運ぶ場合とそうでない場合、他に急いでやらなければならないことがある場合とそうでない場合、いつものとおり帰宅した場合と仕事で帰宅が遅かった場合、などなど、親子関係や家族関係、さらに家庭環境をめぐるさまざまな浮動的な要因によって、「子どもの世話をしている時間」がどのように感じられるかは、常に充実と苦痛の両極の間を揺れ動いていることになるだろう。

同様に質問③（もっと長ければ…）への同意傾向は約40%、質問④（もっと短ければ…）への同意傾向は約14%であったが（図3）、この場合もやはり、「場合による」とする回答が45%近くを占めていた。

一方「自分一人の時間」や「子どもなしで夫婦や友人と過ごす時間」について、どのくらいほしいと感じているかについてたずねた結果が図4である。

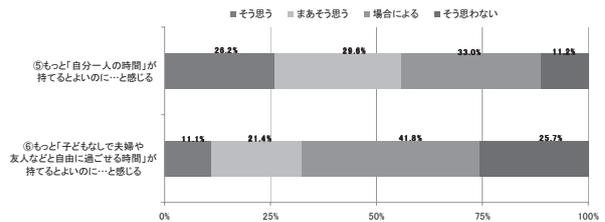


図4 「子どもの世話」以外の時間への希求

「子どもなしで夫婦や友人と」という思い（“そう思う、まあそう思う”）も3割程度あるが、「自分一人の時間」はその倍近くの6割程度に望まれていることがわかる。育児相談や育児をめぐる座談会等によく聞かれる声の一つであるが、「自分」を回復するための「一人の時間」の必要性を感じている母親が多いことを示す結果である。

「子どもの世話をしている時間」の感じ方（充実—苦痛）に対応して、この時間をもっと“長ければ…”と感じるか、逆に“短ければ…”と感じるかが異なることは当然である（図5、図6）が、この場合も先に指摘した「場合による」の割合に注目しておきたい。すなわち「子どもの世話をしている時間にもっとも充実を感じる」に肯定的な場合（“そう思う”）、否定的な場合（“そう思わない”）ともに、「この時間をもっと長ければよいのに」について「場合による」とした回答は2割程度に留まるのに対し、充実感そのものが「場合による」とした回答者750名のうち半数以上が、「この時間をもっと長ければよいのに」についても同様に「場合による」と回答していた。同様の傾向は図6の場合にもみられる。

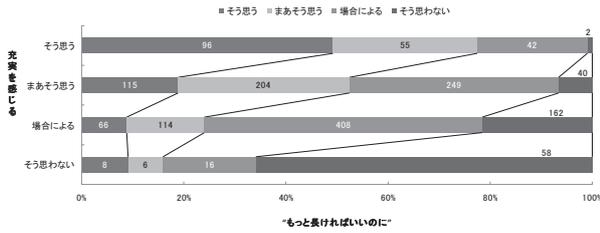


図5 「子どもの世話」への充実感と「もっと長ければ」とのクロス集計 (件数)

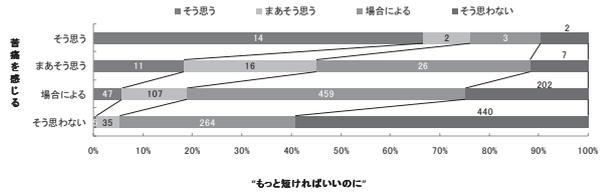


図6 「子どもの世話」への苦痛感と「もっと短ければ」とのクロス集計 (件数)

「子どもの世話をする時間がもっと短ければ…」と感じる度合いによって、子どもから離れる時間(自分一人の時間、夫婦であるいは友人と過ごす時間)をどのくらいほしいと感じるかクロス集計を行った。

「子どもの世話をする時間が短ければよいのに」に同意しない(そう思わない)650人の回答者でさえ、「自分一人の時間」をもつことについては約40%が同意(そう思う、まあそう思う)と回答し、「場合によって」そう感じる者も含めると、この群においても83.7%が「自分一人の時間」への希求を感じている。「もっと短ければ」に同意する場合は言うまでもなく、この時間への希求はより明確に表れている(図7)。

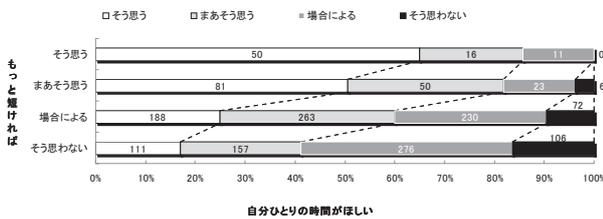


図7 “もっと短ければ”と「自分一人の時間がほしい」とのクロス集計 (件数)

「子どもなしで夫婦または友人と過ごす時間」については、「自分一人の時間」に比べると、「場合による」とする比率が増加するが、傾向としてはほぼ同様であった(図8)。

この6項目の主成分分析を行ったところ2つの主成分が抽出された。第1主成分は「充実を感じる」及び「もっと長ければ」から構成され、第2主成分は「一人の時

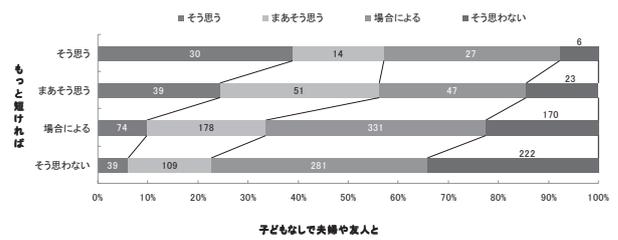


図8 “もっと短ければ”と「夫婦や友人との時間がほしい」とのクロス集計 (件数)

間」及び「夫婦等の時間」から構成されていたが、「苦痛を感じる」及び「もっと短ければ」は第1主成分には中程度の負の負荷を、第2主成分には中程度の正の負荷を示した。この結果から

- ・「世話への充実感」=「充実を感じる」と「もっと長ければ」の平均得点
- ・「世話からの解放」=「一人の時間と「夫婦等の時間」の平均得点

を、各回答者について算出し、後の分析(4. 結果と考察IIの(2))において用いる合成得点とした。

(4) 朝食、夕食、風呂、就寝の各生活場面について

「子どもの世話をする時間」のうち、代表的な4つの場面について、詳細に検討した。図9は4つの場面にかける平均時間(分)を、平日と休日とで比較したグラフである。



図9 朝食・夕食・風呂・就寝にかかる時間の平日/休日比較(分)

平日の朝食場を除けば、各生活場面にかけている平均的な時間は概ね30分前後という結果である。この中で平日、休日ともにもっとも時間をかける場面は夕食であり、平日が約33分、休日が約40分であった。風呂や就寝も平日より休日がやや長いものの大きな違いはみられない。平日と休日とでもっとも異なるのが朝食にかかる時間であり、平日は約18分であるのに対して休日は29分となった。

次に各場面の“楽しさ”について、平日と休日と比較した。後の分析に用いるため4段階の評定尺度を用いて回答を求めたが、ここでは仮にこの4段階をカテゴリーとして扱い、各評定カテゴリーの選択人数(%)を単純に比較して検討を行った。

朝食では、平日-休日間で感じ方に非常に大きな差がみられた。特に平日において「楽しくない」とする回答が4場面中もっとも多く、「場合による」を含めると75.5

%にのぼった（図10）。

夕食でも同様の傾向が見られるが、その差は朝食の場合ほど極端ではなく、また全体として平日も朝食の場合より楽しめている割合が高かった（図11）。

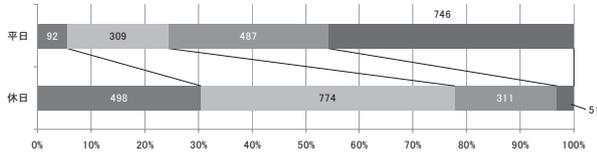


図10 朝食の時間の楽しさ (平日/休日比較) (件数)

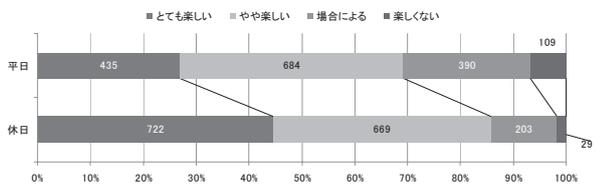


図11 夕食の時間の楽しさ (平日/休日比較) (件数)

風呂と就寝については、主に担当する人をたずねた。父親の育児参加が叫ばれて久しいが、風呂の担当について回答のあった1,560件のうち父親の担当は477件（担当率30.6%）、就寝の担当について回答のあった1,490件のうち父親の担当は140件（9.4%）で、まだまだ育児は母親主体で進められていることがわかる。風呂は、全体に楽しい時間と感じられている割合が高く、平日と休日の差もあまり大きくない（図12）。

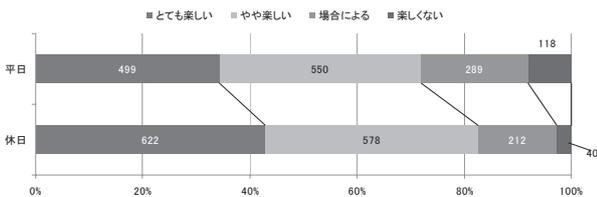


図12 風呂の時間の楽しさ (平日/休日比較) (件数)

これらに対して就寝は異なる傾向が見られた。4つの場面の中では、「場合による」という回答が最も多く、日によって浮動する要因（子どもの状態など）によって楽しくも苦しくもなる“魔の時間”ということであろう。平日に楽しめている割合も、朝食に次いで低かった（図13）。

今回の分析対象者はすべて母親であるが、母親自身が風呂や就寝を担当している場合と、父親がこれらを担当している場合とで、感じられる楽しさ（楽しめなさ）に差があるかどうか検討した（ここでは評定値をカテゴリーではなく尺度値として扱い平均評定値を比較した）。

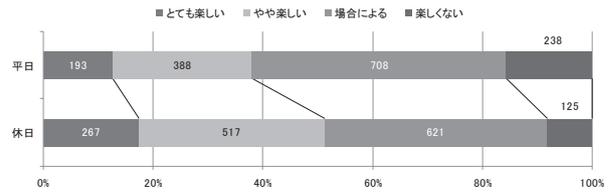


図13 就寝の時間の楽しさ (平日/休日比較) (件数)

風呂では平日においても休日においても、有意な差が認められなかった。就寝でも同様に、平日、休日とも有意な差がみられなかった。

平日及び休日の4つの生活場面の楽しさに関する8つの評価得点についてCronbachの α を算出したところ、 $\alpha = .839$ と高く、また除外することによって α が高くなるような項目も見出せなかったことから、これら8得点の平均値を「生活時間の楽しさ」に関する合成得点と考え各回答者について算出し、後の分析において用いることとした。

(5) 子どもに苛立ちを感じたり腹が立ったりする場面について

15の場面に対する4段階の評定は尺度値であるが、各場面に対して養育者（母親）がどのくらいの割合で腹立ちを感じるのかについて概観するために、各評定値を選択した人数（割合）を示した（図14、「すごく腹が立つ」と「少し腹が立つ」の合計人数の割合が多い順）。設定した15場面について「少し腹が立つ」以上の回答が最低でも約4分の1の回答者から得られ、これらが育児場面で比較的良好に経験される項目として一定の妥当性をもつものであったと思われる。特定の生活場面（食事、睡眠、着替え、排泄、テレビ）に結びついている腹立ちの割合は全体に低く、朝の出かける場面だけは突出していた。他は子どもとの関わりの中で特定の場面に限らず経験されるもので、「聞きわけがない」「同じことを何度も」「泣き止まない」といった内容が上位を占めた。

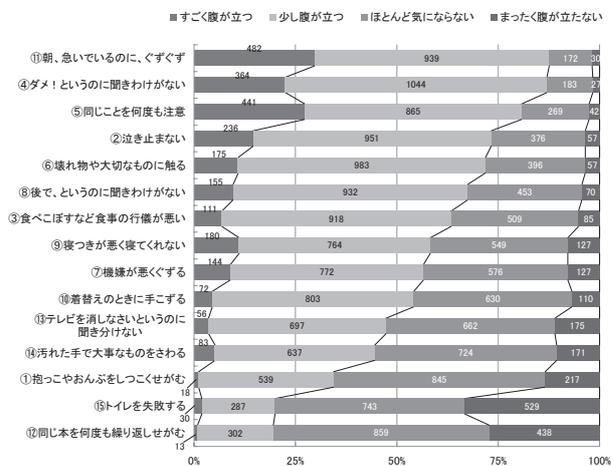


図14 子どもについて腹を立てる場面に関する評定値の分布 (件数)

これら15項目について因子分析（主因子法）を行ったところ、2つの因子が見出された。2つともに同程度の負荷を示す3項目を除いた上、バリマックス回転を行った後の結果を表1に示した。

表1 腹立ちの因子分析（主因子法）バリマックス回転後の因子負荷量

質問項目	因子1	因子2
⑤同じことを何度も注意	.650	.228
⑥壊れ物や大切なものに触る	.593	.204
⑭汚れた手で大事なものをさわる	.570	.263
④ダメ!というのに聞きわけがない	.522	.330
⑬テレビを消しなさいというのに聞き分けなし	.504	.244
⑪朝、急いでいるのに、ぐずぐず	.494	.320
③食べこぼすなど食事の行儀が悪い	.482	.171
②泣き止まない	.180	.625
⑦機嫌が悪くぐずる	.196	.560
①抱っこやおんぶをしつこくせがむ	.235	.498
⑫同じ本を何度も繰り返しせがむ	.274	.391
⑨寝つきが悪く寝てくれない	.245	.385
因子寄与率	2.362 19.69%	1.716 14.30%

第1因子に高い負荷を示す項目は「子どもが言うことを聞かない」(子どもの行動を思うようにコントロールできない)ことを意味するものであり、「制御困難」と解釈した。これに対して第2因子に高い負荷を示した項目は「子どもの強い情緒的反応や状態を受け入れることができない」ことを意味するものであり、「受容困難」と解釈した。

それぞれの因子得点（標準得点）を各回答者について算出するとともに、「制御困難」及び「受容困難」それぞれについて次のような3群を構成した。

- ・低群：平均値(0)－5未満
- ・中群：平均値(0)－5以上，平均値(0)+5未満
- ・高群：平均値(0)+5以上

高群は高い程度に「制御困難」や「受容困難」を感じている群を意味し、中群は平均程度に、また低群は「制御困難」や「受容困難」をあまり感じない群を意味している。

各群の構成比を家族構成（核家族・祖父母同居の2群）及び子どもの人数（1人・2人・3人の3群）とクロスさせて表2に示した。子どもの人数については4人以上のケースが47件（2.7%）と少ないためこれを除外した。

表2 制御困難群，受容困難群と家族構成・子どもの人数とのクロス集計（件数）

家族構成	子どもの人数	制御困難				受容困難			
		低	中	高	合計	低	中	高	合計
核家族	1人	328	473	355	1156	343	451	362	1156
	2人	96	171	109	376	118	148	110	376
祖父母同居	1人	424	644	464	1532	461	599	472	1532
合計	1人	232	208	112	552	172	219	161	552
	2人	143	323	237	703	207	275	221	703
	3人	47	100	111	258	80	94	84	258
合計		422	631	460	1513	459	588	466	1513

制御困難，受容困難と家族構成及び子どもの人数との間に関連が見られるかどうか検討した結果，統計的有意差がみられたのは「制御困難」－「子どもの人数」のみであった ($\chi^2=102.91$, $df=4$, $p<.001$)。子どもが1人の場合，制御困難低群の比率が高い（制御困難高群の比率が低い）傾向が見られる（図15）。

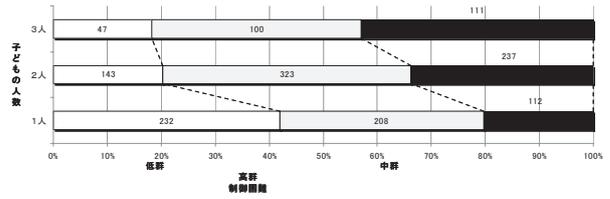


図15 制御困難3群別の子ども的人数（件数）

(6) 子どもの対人関係の“気になる様子”について

この項目では保育所に通わせている児が複数いる場合，“気になる様子”に関する回答者（母親）のイメージをより具体的なものにするため，回答対象となる児を任意に1人選択した上で回答するよう求めた。有効回答は1,505名，回答の対象となった児の平均年齢は3.6才で，その年齢構成は図16のとおりであった。

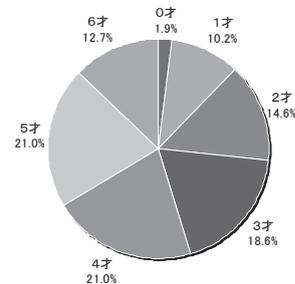


図16 気になる様子の回答対象となった子どもの年齢分布

14の場面に対する4段階の評定は尺度値であるが，各様子に対して養育者（母親）がどのくらいの割合で気になるのかについて概観するために，各評定値を選択した人数（割合）を示した（図17，“気になる”と“ときどき気になる”の合計人数の割合が多い順）。

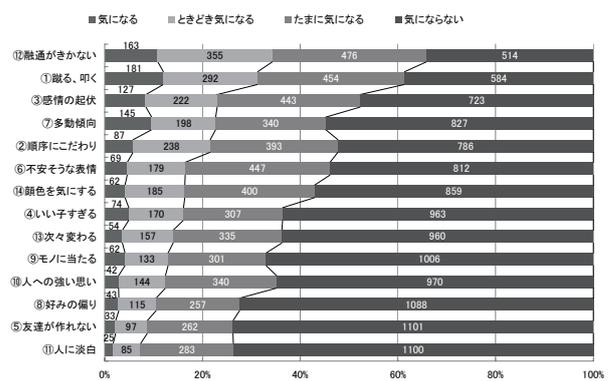


図17 子どもの気になる様子に関する評定値の分布(件数)

「気にならない」の比率がもっとも低い項目（⑪）でさえ75%程度である（25%は“たまに気になる”以上）という結果であり，全体として母親はかなり神経質に子どもの様子を捉えていることを示していると言えるだろう。

仮に“たまに気になる”くらいは通常の範囲と考えて，グラフの「気になる」と「ときどき気になる」を合わせ

た比率に注目してみると、その合計が2割を超える項目は、多い順に次の5項目であった。

- ・「がんで融通がきかないところがある（34.3%）」
- ・「気に入らないと、蹴る、叩くなど乱暴な行動が出やすい（31.3%）」
- ・「機嫌がよい時と悪い時の差が激しいなど、感情の起伏が大きい（23.1%）」
- ・「落ち着きがなく、ちょこちょこ動き回る（22.7%）」
- ・「決まったことがら、物ごとの順序、などにこだわる（21.6%）」

次に、こうした“気になる様子”が年齢によってどのくらい異なる傾向があるかについて検討した。「気になる」と「ときどき気になる」の人数のみを6つの年齢級（0歳と1歳は1つの年齢級として合算）ごとに集計し、気になる様子ごとに各年齢級の占める割合を示したのが図18である。回答全体に占める各年齢級の割合をグラフ最上部に示した。

⑭「大人の顔色を気にしすぎる」⑧「服や持ち物などの好み片寄っている」④「聞き分けが良すぎてどこか無理をしているのでは…と思う」といった様子は4～6才児に多く見られるのに対し、⑨「人や物にあたるような行動が多く、ときどき物を壊したりする」①「気に入らないと、蹴る、叩くなど乱暴な行動が出やすい」といった様子は0～3才児が50%を占める…といった傾向が見られるものの、全体としては多くの行動について、すべての年齢級でまんべんなく「気になる様子」として、母親に受けとめられている、と言える。

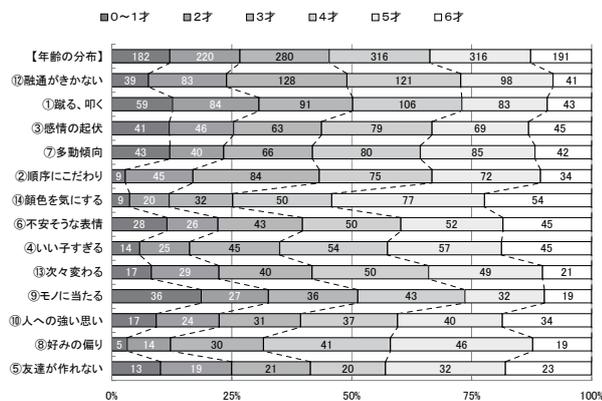


図18 気になる様子ごとに各年齢級の占める割合(件数)

これら14項目はもともと7因子構造が見出された48項目から抽出したものであったが、今回の14項目について因子分析を行ったところ、元の因子構造に対応した関係が見出しにくかった。14項目についてCronbachの α を算出したところ、 $\alpha = .789$ と比較的高く、項目④を除外した場合のみ $\alpha = .792$ と高くなることがわかったので、④を除いた13項目の平均値を「子どもの気になる様子」に関する合成得点と考え各回答者について算出し、後の分析において用いることとした（得点が高いほど、子どもの様子が気になることを示す）。

(7) 母親自身の対人関係について

養育者（母親）自身の対人関係全般について3段階で回答を求めたところ、図19に示したように、対人関係（コミュニケーション）が「苦手」と答えた人は、全体の4分の1弱、反対に「得意」と答えた人は、全体の約13%、残りの約6割は「普通」という結果であった。

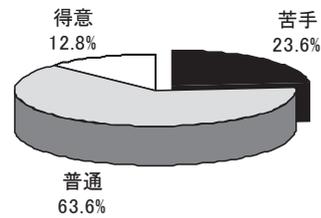


図19 母親の対人関係の得意/苦手

次に生活の中の5つの代表的な関係について、そのコミュニケーションが「楽」「まあ楽」「場合による」「疲れる」の4段階で回答を求めた。図20は5つの場面についての評定を比較したものである。「家庭で子どもと」→「家庭の大人同士」→「職場で同僚と」の順にコミュニケーション上の“疲れる”度合いは増加していくが、もっとも“疲れる”コミュニケーションは「保育所での保護者同士のコミュニケーション」という結果になった。

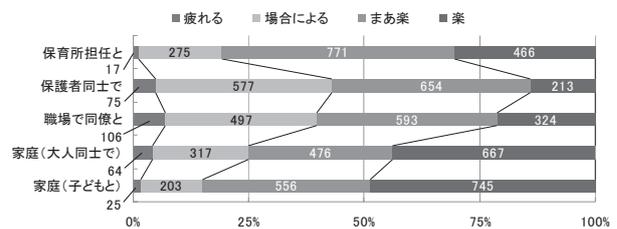


図20 母親の対人コミュニケーション（全体）

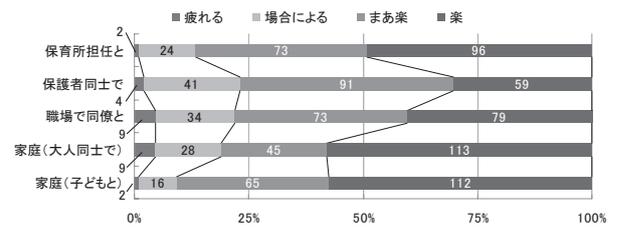


図21 母親の対人コミュニケーション（得意群）

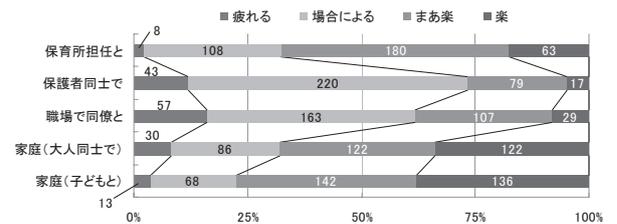


図22 母親の対人コミュニケーション（苦手群）

一方、「保育所での担任（保育者）とのコミュニケーション」は、家庭における大人同士のコミュニケーションと同様かそれ以下のストレスという結果になり、保護者同士の場合と対照的な結果であった。

この傾向について対人関係「得意」群と「苦手」群を比較すると（図21，図22），傾向としては同様であるがその比率が大きく異なり，苦手群の保護者同士の対人関係においては約4分の3が何らかのストレスを感じているという結果になった。

4. 結果と考察Ⅱ

一 「制御困難」「受容困難」群間の差の検討

前項で子どもに苛立ちを感じたり腹が立つ15の場面に對する評定から，2つの因子「制御困難」及び「受容困難」を抽出した。また因子得点に基づき，低・中・高の3群をそれぞれ構成した。ここでは子どもへの否定的な感情（腹立ち，苛立ち）の喚起に2つの種類があると仮定し，これらと他の測度との関連について検討した。

(1) 子どもと関わる時間（時間比率）との関連

平日及び休日の在宅時間全体を10とした場合の「子どもの世話をする時間」及び「子どもと遊ぶ時間」の比率割当について，3群間の差を検討した（表3，表4，「時間比率」欄：数値はいずれも比率の平均値）。「制御困難」が低群から高群になるにつれ，「子どもと遊ぶ時間」の比率は，平日，休日とも有意に下がっているが，この傾向は「子どもの世話をする」時間比率には見られなかった（図23）。

「受容困難」の3群についても，平均値には同様の傾向が見られるが，統計的に有意な差がみられたのは「子どもと遊ぶ（休日）」のみであった。

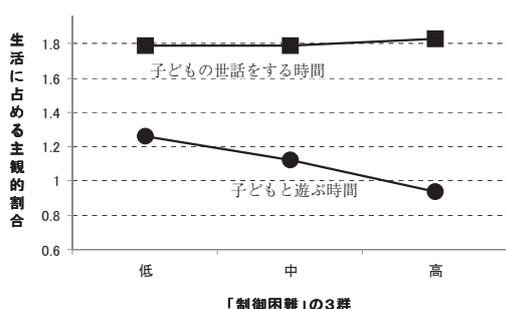


図23 制御困難3群の「子どもの世話をする時間」「子どもと遊ぶ時間」の差

(2) 育児時間への評価との関連

「子どもの世話をする時間」への評価等から算出した2つの得点（「世話への充実感」「世話からの解放」）については，「制御困難」の3群間においても，「受容困難」の3群間においても，有意な差がみられた（表3，表4，「育児時間への評価」欄：数値はいずれも標準化された主成分得点の平均値で，充実感については得点が高いほど充実感を感じていることを意味し，解放については得点が高いほど育児から解放されたいと感じていることを意味する）。

「子どもの世話への充実感」については，「制御困難」及び「受容困難」が高い群ほど得点は有意に低くなり，「子どもの世話からの解放」については，「制御困難」及び「受容困難」が高い群ほど得点は有意に高くなる傾向が見られた（図24）。ただし「受容困難」については高群のみが他の2群と比べて有意に高い結果となった。

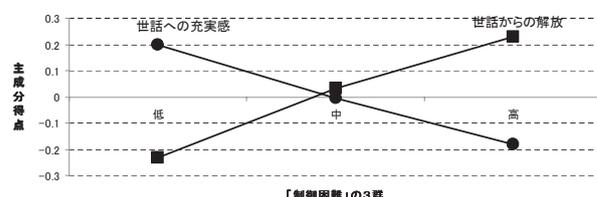


図24 制御困難3群の「子どもの世話をする時間」に関する評価の差

(3) 生活場面の楽しさとの関連

4つの生活場面（朝食，夕食，風呂，就寝）の楽しさに関する評価を平均して得られた「生活時間の楽しさ」得点について，「制御困難」及び「受容困難」の3群間の比較を行ったところ，いずれの場合も低群から高群に向かうにつれて得点が有意に低下する傾向が見られた（表3，表4，「生活場面の楽しさ」欄：数値はいずれも4段階評価点の平均値で高いほど楽しさを感じていることになる）。

(4) 子どもの気になる様子（対人関係）との関連

主として対人関係に関する子どもの様子（14場面）について，気になる程度を表す平均得点を算出し，「制御困難」及び「受容困難」による3群間の差を検討した。いずれの場合も有意差がみられ，低群から高群に向かうにつれて気になる度合い（得点）は高くなる傾向がみられる。ただし「制御困難」の場合は，「平均的な群（中群）及び高群と比較して，低群が低い」傾向（表3）がみられるのに対し，「受容困難」の場合は，「低群及び平均的な群（中群）と比較して，高群が高い」傾向（表4）がみられる。

制御困難を強く感じているからといって，子どもの行動が特に気になるというより，むしろそれは平均的な親にも共通に見られる傾向といえよう。これに対して，受容困難を強く感じている場合には，そうでない平均的な親と比べ，子どものいちいちの行動が気になる傾向が強いといえる。

(5) 母親自身の対人関係との関連について

対人コミュニケーション全体についての得手－不得手の評価，及び5つの具体的な対人関係についての楽しさ加減について評定を求めたが，これらの平均評定値（いずれも数値が高いほど，対人関係が得意あるいは楽と感じていることを示す）を「制御困難」「受容困難」の3群間で比較した（表3，表4，母親自身の対人コミュニケーション欄）。統計的な有意差については表中に示したとおりで，「制御困難」については社会的な成人間の対人

関係とは関連が見られなかったが、全体としては低群から高群に向かうにつれ、母親自身の対人関係の得点も低くなる(得意ではない、楽ではない)傾向がみられた。

表3 制御困難3群間の有意差の検討

		制御困難			分散分析	群間差
		低	中	高		
時間比率	子どもの世話をする(平日)	1.79	1.79	1.83	NS	
	子どもの世話をする(休日)	1.91	1.85	1.94	NS	
	子どもと遊ぶ(平日)	1.26	1.12	0.94	F=22.152(df=2,1502)p<.001	低-中-高-低-高
	子どもと遊ぶ(休日)	2.16	2.00	1.86	F=13.596(df=2,1487)p<.001	低-中-高-低-高
育児時間への評価	子どもの世話への充実感	0.199	-0.006	-0.182	F=16.478(df=2,1537)p<.001	低-中-高-低-高
	子どもの世話からの解放	-0.231	0.034	0.230	F=24.331(df=2,1537)p<.001	低-中-高-低-高
	生活場面の楽しさ	2.93	2.76	2.63	F=30.419(df=2,1546)p<.001	低-中-高-低-高
	子どもの気になる対人関係	1.98	1.68	1.72	F=10.230(df=2,1438)p<.001	低-中-高-低-高
母親自身の対人コミュニケーション	対人コミュニケーション全般	1.92	1.91	1.82	F=4.193(df=2,1438)p<.05	
	家庭での子どもとの関係	3.46	3.33	3.19	F=15.612(df=2,1439)p<.001	低-中-高-低-高
	家庭での大人同士の関係	3.27	3.14	3.02	F=8.258(df=2,1435)p<.001	低-高
	職場の同僚との関係	2.77	2.76	2.67	NS	
	保育所保護者との関係	2.70	2.67	2.58	NS	
	保育所担任保育士との関係	3.19	3.06	3.05	F=4.357(df=2,1439)p<.05	低-高

表4 受容困難3群間の有意差の検討

		受容困難			分散分析	群間差
		低	中	高		
時間比率	子どもの世話をする(平日)	1.84	1.82	1.75	NS	
	子どもの世話をする(休日)	1.85	1.93	1.90	NS	
	子どもと遊ぶ(平日)	1.14	1.09	1.09	NS	
	子どもと遊ぶ(休日)	2.12	2.01	1.90	F=6.419(df=2,1487)p<.01	低-高
育児時間への評価	子どもの世話への充実感	0.229	0.002	-0.234	F=25.989(df=2,1537)p<.001	低-中-高-低-高
	子どもの世話からの解放	-0.158	-0.023	0.249	F=20.771(df=2,1537)p<.001	中-高-低-高
	生活場面の楽しさ	2.977	2.785	2.544	F=71.119(df=2,1546)p<.001	低-中-高-低-高
	子どもの気になる対人関係	1.62	1.61	1.77	F=18.093(df=2,1438)p<.001	中-高-低-高
母親自身の対人コミュニケーション	対人コミュニケーション全般	2.00	1.89	1.77	F=15.975(df=2,1438)p<.001	低-中-高-低-高
	家庭での子どもとの関係	3.51	3.35	3.12	F=30.334(df=2,1439)p<.001	低-中-高-低-高
	家庭での大人同士の関係	3.24	3.14	3.04	F=5.915(df=2,1435)p<.01	低-高
	職場の同僚との関係	2.80	2.76	2.66	F=3.650(df=2,1429)p<.05	低-高
	保育所保護者との関係	2.76	2.66	2.51	F=12.768(df=2,1436)p<.001	中-高-低-高
	保育所担任保育士との関係	3.20	3.12	2.98	F=11.457(df=2,1439)p<.001	中-高-低-高

(6) 得点間の関連について

以上(1)~(5)でみてきた各得点と「制御困難」及び「受容困難」との関連について要約的に整理する目的で、主成分得点「制御困難」及び「受容困難」を目的変数とする重回帰分析(強制投入法)を行った。いずれも高いとはいえないが有意な回帰が得られた。結果を表5に示す。

表5 重回帰分析結果

		有意な標準化係数(β)	
		制御困難	受容困難
育児時間への評価	子どもの世話への充実感	-0.069	-0.06
	子どもの世話からの解放	0.113	0.103
生活場面の楽しさ		-0.121	-0.194
子どもの気になる対人関係		0.101	0.059
母親自身の対人コミュニケーション	家庭での子どもとの関係	-1.989	0.06
	家庭での大人同士の関係		-0.116
	職場の同僚との関係		
	保育所保護者との関係		-0.06
	保育所担任保育士との関係		

(R²=.090) (R²=.134)

「制御困難」についても「受容困難」についても、「育児時間への評価」「生活場面の楽しさ」「子どもの気になる対人関係」は同じ効果をもっているといえる。すなわち、子どもに対して感じる否定的感情は、育児時間に対する評価や生活場面の楽しさを向上させること、子どもの様子が気になる程度を緩和することで減少する(またその反対に増加する)ことが示唆される。また同時に「子どもの対人関係」が気になる度合いが、大きな効果をもつのは「制御困難」に対してであることもわかる。

「制御困難」に対して大きな関連をもつ要因が母親自身の「家庭での子どもとの関係」であり、これが楽であ

ると感じられることは制御困難の得点を大きく下げることになる(またその逆でもある)。これに対して「受容困難」に関連する母親自身の対人関係は、むしろ「家庭での大人同士の関係」や「保育所保護者との関係」であり、特に前者について楽だと感じる事が、「受容困難」の得点を下げることにつながることは重要であろう。

5. おわりに

保育所園における子育て支援、中でも保護者に対する支援の依って立つべき理論や方法論を追求する試みの一つとして、本論では親子の関係に対する心理臨床的支援という立場から、保育実践における保護者支援の手がかりとなる指標(見方)を得ることを目的に、アンケート調査の分析を行った。その結果、子どもに対してつい腹立ちを感じる場面の分析から、子どもの行動をうまくコントロールできない「制御困難」因子と、子どもからの関わりを感情的に受け入れることができない「受容困難」因子の存在が示唆された。こうした2つの因子に着目することの臨床的な意義については、追加の資料分析を加えた上、今後詳報する予定である。

参考文献

荒巻美佐子・安藤智子・岩藤裕美・金丸智美・丹羽さがの・立石陽子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆。(2004). 幼稚園における子育て支援の利用状況: 育児不安との関連から. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 2, 17-26.

荒巻美佐子・無藤隆。(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究, 19(2), 87-97.

江上園子。(2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全. 発達心理学研究, 16(2), 122-134.

肥後功一。(2001). “気になる子”の心理臨床的理解(第1報): 保育者による“気になる子”の記述から. 島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要, 1, 61-77.

肥後功一。(2004). “気になる子”の心理臨床的理解(第2報): 小学校担任による「子どもの気になる様子」の認知. 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要, 3, 83-97.

菅野幸恵。(2001). 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究, 12(1), 12-23.

菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田)暁子。(2009). 母親は子どもへの不快感をどのように説明するか: 第1子誕生後2年間の縦断的研究から. 発達心理学研究, 20(1), 74-85.

- 笠原正洋. (2000). 保育者による育児支援：子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から. 中村学園研究紀要. 32, 51-58.
- 笠原正洋. (2004). 保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何がかかわっているのか. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要. 36, 25-31.
- 加藤道代・鶴田千鶴. (1998). 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討. 小児保健研究, 57(3), 433-440.
- 小林佐知子. (2006). 妊娠期から産後1ヶ月にかけての初産婦のストレスと対処行動の様相：対処行動の柔軟性の視点から. 小児保健研究, 65, 740-745.
- 小林佐知子. (2009). 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連. 発達心理学研究, 20(2), 189-197.
- 牧野カツコ. (1982). 乳幼児をもつ母親と〈育児不安〉. 家庭研究所紀要, 3, 35-56.
- ミネルヴァ書房編. (2008). 保育所保育指針 幼稚園教育要領：解説とポイント. 京都：ミネルヴァ書房.
- 宮本純子. (2007). 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究. 心理臨床学研究, 25(3), 346-355.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究, 64, 409-416.
- 谷田征子・青木紀久代. (2009). 母親からみた夫婦間の相互性と子育てに対する感情との関連：地域ネットワークに着目して. 心理臨床学研究, 27(2), 152-162.

付記

本研究の調査にご協力いただきました松江市保育協議会及び松江市保育研究会の皆様にご心より感謝いたします。

本研究の実施にあたっては平成18年度科学研究費補助金（萌芽研究・課題番号16653061）の、また資料の解析にあたっては平成19・20年度科学研究費補助金（基盤研究(C)・課題番号19530622）の助成を受けた。

